

「地域社会と大学資源の相互活用方策」の社会的実験 の実施報告 ～ 宇都宮市民大学「心と身体の健康を支える地域づくり」～

廣瀬隆人（宇都宮大学生涯学習教育研究センター）

本調査研究において、宇都宮市民大学を利用して、地域連携の実践的研究を次の通り行った。

1 事業の経緯

宇都宮市民大学(1993～)は宇都宮市中央生涯学習センター事業として実施されている一般成人を対象とした学習機会提供事業である。市民に高度で専門的な学習ニーズに対応し、日常生活や仕事の上で役に立つ知識や技術を身につける生涯学習講座として企画されたものである。1年を前期と後期に分け、後期は宇都宮大学その他、宇都宮短期大学、帝京大学、文星芸術大学など市内の大学と提携した連携した「大学連携専門講座」として実施されている。

講座は宇都宮市民大学運営協議会会長名で各大学に依頼されており、学習プログラムや講師・実施内容も全て当該大学で企画立案することとなっている（平成16年8月23日付宇市協第6号）。

今回は、本学の研究協力課・生涯学習教育研究センターを通じて、本プロジェクトに相談があり、本プロジェクトの調査研究と地域社会との連携のあり方を模索する上でも有意義であるという判断から実施することとなった。本プロジェクトとしては、地域社会と大学資源の相互活用方策というメインテーマとの関連から、宇都宮市との連携の形として講座の企画立案、提供という実践的な研究として位置づけることとした。

2 実施した学習プログラム

(1) 概要

学部横断の学際的プロジェクトによる心と身体の健康を創造する、地域社会の形成を目指す研究の成果を、講座という形で提供するものである。多彩な研究者集団による研究成果を生かした地域提案型の講座である。全体として、研究の成果を住民に提供するという視点ではなく、プロジェクト研究の成果を地域の住民とともに考えるというコンセプトで実施した。

(2) 実施概要

日時：12月2日(木)～1月21日(金) 7回実施 19:00～21:00

会場：宇都宮市中央生涯学習センター(宇都宮市中央1丁目1-13) 501ホール

対象：宇都宮市内に在住・在勤・在学している18歳以上の人。

定員：50名 応募者数17名 受講者数15名

参加者は中高年によって構成されていた。昼間に仕事を持っている参加者が半数以上を占めており、目的意識が明確な参加者が多い。

広報：広報うつのみや・パンフレット

協力：運営には宇都宮市中央生涯学習センターで養成した生涯学習ボランティア 2 名が常時運営を補助していた。

(3)プログラム

回	期 日	テーマ	担 当	数
1	12月 2日(木)	総合型地域スポーツクラブの研究	国際学部教授 中村祐司	12
2	12月 7日(火)	宇都宮市民は歩いているか	工学部助教授 森本章倫	10
3	12月 9日(木)	事例研究 ハピスカとよさかの実践	生涯センター教授 廣瀬隆人	11
4	12月14日(火)	植物や園芸による癒し	農学部助教授 山根健治	12
5	1月11日(火)	心と身体の健康のために	社保病院保健師塚本暢子 生涯センター教授 廣瀬隆人	9
6	1月13日(木)	地域スポーツ活動～市民と行政の連携	国際学部教授 中村祐司	9
7	1月21日(金)	市民農園の現状と将来	農学部助教授 野口良造	8

3 各講義概要と講師の感想

1	12月 2日(木)	総合型地域スポーツクラブの研究	国際学部教授 中村祐司	12
---	-----------	-----------------	-------------	----

(1)講義概要

「スポーツ・健康のまちづくり～総合型地域スポーツクラブの研究～」と題して、特に分権型社会の時代において、これからの草の根住民活動の一形態として注目されつつある「総合型地域スポーツクラブ」をめぐる課題と展望について諸外国の事例も含めて前半で講義を行い、後半を質疑応答、意見交換に充てた。例えば、課題として指摘されるような以下のようなことである。すなわち、「総合型地域スポーツクラブ事業そのものが文部科学省の地方自治体や地域社会に対する誘導戦略として進められ、運営をめぐるマニュアル作成や設置に至る過程の中身など、上意下達式に手取り足取りでなされる。このことは単に国と地方との関係のみならず、地方間、地域社会間でのクラブ運営をめぐる横並び意識から発する政策の水平的画一性をもたらし、ひいてはまさに金太郎飴的なクラブ運営が全国津々浦々に浸透するような状況を生み出すかもしれない」といったことである。

(2)感想

真剣に耳を傾ける受講生が多かった。後半の意見交換でわかったのだが、社会人受講生の場合、学部学生とは異なり、自分の考えをある程度確立されている方が多いし、テーマに関連する経験を豊富に持っている受講生も多いという印象を受けた。総合型地域スポーツクラブは、複数のスポーツ種目に限定せず、例えば音楽・読書活動や囲碁・将棋など

他の文化活動をも包括する可能性もある点を指摘した。スポーツ活動については見るのもするのもあまり関心がないといった受講生にとっても、地域活動に関心の目をむける一定の刺激を与えることができたのではないか。

2	12月 7日(火)	宇都宮市民は歩いているか	工学部助教授 森本章倫	10
---	-----------	--------------	-------------	----

(1) 講義概要 「宇都宮市民は歩いているのか：歩行行動と街づくり」

宇都宮市民は歩いているか

- ・昭和 50 年から平成 4 年にかけて、徒歩の割合は激減し、自動車の利用率が高まっている。
- ・大都市と比べると宇都宮市民は歩いていない。自動車依存型社会の弊害
都心商店街 vs. 郊外大型店
- ・都心商店街と郊外大型店を比べると都心商店街の方が歩いている
- ・年齢が 50 代以上の方の歩行行動が異なる
- ・都心商店街の復活は郊外大型店舗に対してどんな差別化ができるかにかかっている

魅力ある街と歩行行動

- ・魅力ある街では人々は「うろつき行動」をおこす。
- ・街内を散策できるようにするにはどのような要素が必要なのか。
歩行者と公共交通
- ・魅力ある歩行空間の創造と公共交通の整備は一体的に
- ・一つの道路空間を取り合うにはそれなりの市民合意が必要：自動車から歩行者へ
- ・新しい交通機関導入による交通流の変化と街並みの変化

< 配布資料 > : 以下の論文 3 点を配布

- 1) 中心市街地と郊外大型店における歩行行動の差異に関する研究
- 2) うろつき度による中心市街地の魅力評価に関する研究
- 3) トランジットモール導入における合意形成ツールの開発

(2) 感想

今回、市民大学で講義を行い聴講した市民の意識の高さに驚いた。普段の学生相手の講義ではなかなか盛り上がらない質疑応答で、活発な意見が出され私自身も大変勉強になった。ただ参加者の中に、理解度や感じ方に温度差があるため、講義での説明の仕方や進行については細心の注意が必要ではないかと感じた。また機会があれば市民大学での講義をお手伝いしたい。

3	12月 9日(木)	事例研究 ハピスカとよさかの実践	生涯センター教授 廣瀬隆人	11
---	-----------	------------------	---------------	----

(1) 講義概要

前半は、この講座の趣旨やプロジェクトについて質問があったのでその回答に時間を充てた。同時に参加者の自己紹介を行った。自己紹介ではこれまで2回の講義について感想を併せて語ってもらった。中村、森本両氏の講義は好評であり、論文をもらったことは研究の形を見ることができたという感想も出て、効果が見られた。参加者からはもっと参加者同士の交流がしたいという感想が聞かれた。

後半は総合型地域スポーツクラブの事例研究で新潟県豊栄市のハピスカとよさかの事例をやや詳細に報告した。しかし、参加者からはNPO そのものや健康と地域づくりの関係についての質問があったりと散漫になってきたが、ハピスカとよさかの事例に引き寄せて回答した。

参加者からの質問に対応し、欧州の第三期大学について解説した。人の加齢パターンを生まれてから仕事につくまでの第一期、働き、家族の世話をする第二期、そして死を前にした依存と老衰の第四期という考え方から、退職後の健康で、活動的で、自己達成の可能性を秘めた年月として第三期を過ごすという考え方である。そして第三期の学習・社会参加活動を充実することにより、安定した豊かな第四期を迎えることができるのである。これまでは全生涯を第二期に費やし、人生の自己実現の中核をなすのが第二期での生活と考えられてきたが、ここでは、様々な規範からある程度解放され自己実現の可能性を目指す時期として第三期をとらえている。「第三期の大学」は、ヨーロッパ全土でネットワーク化され、国際的に成人教育の成功事例として紹介されている。高齢者の学習活動は、高齢者の自信、独立心を育てることとなりそれが私的な資源に対する需要の増加を抑制する（高齢者による国庫への依存を遅らせ、縮小することや複雑化する社会の変化への対応、地域社会への貢献度を高めるといった意義があるとされている。

(2) 感想

3回目ということもあり、参加者のニーズや雰囲気把握して次回以降の講師陣に伝達することを意識したため、内容と言うよりは展開や方法に流れてしまった。各回のテーマが現実的に異質であることから参加者に共通の興味関心を引き出すことに傾斜した。できれば私が講座の先頭で参加者の状況やニーズを調査するように進めると他の講師のストレスを負荷せず準備ができると考えられる。

4	12月14日(火)	植物や園芸による癒し	農学部助教授 山根健治	12
---	-----------	------------	-------------	----

(1) 講義概要「植物や園芸による癒し 何気なく見過ごしてはいませんか」(植物の効用と園芸福祉)

① 都市生活と緑

公園や街路樹による憩いの場の創出

「ヒートアイランド現象」緩和

ビ・トプ bio(生物)+top(場所)
 大気浄化作用 自動車排ガスと沿道樹林
 プロック塀か生け垣か
 災害対策

2 室内環境と植物～植物の空気浄化によるシックハウス症候群の予防効果
 化学物質の除去
 湿度調節機能

3 植物の心理・生理的影響
 自然と都市の景観が心理・生理に及ぼす影響
 病室からの景色が外科手術患者の回復に及ぼす影響
 鉢苗の移植作業が脳波、筋電図、瞬き率、感情に及ぼす影響
 みどりの香りによるリフレッシュ～森林浴・アロマテラピー

4 園芸療法・園芸福祉について
 社会的背景
 作業療法としての園芸療法
 園芸療法の定義
 療法(Therapy)か福祉(Welfare)か
 対象となる施設
 園芸療法・福祉の効用
 園芸療法・福祉の実施例 宇都宮大学学園祭「芸術の秋を満喫しよう！」など

5 まとめ 園芸の人の(広義の)福祉とQOLにおける役割

(2)感想

皆さん熱心に聞いておられたので話しやすかった。また、皆さんの園芸活動についての体験や疑問などそれぞれ適度に語って頂き、スムーズに進行できた。ある程度内容を共有できたのではと感じた。

5	1月11日(火)	心と健康の健康のために	社保病院保健師塚本暢子 生涯センター教授 廣瀬隆人	9
---	----------	-------------	------------------------------	---

(1)講義概要

前半は、前回(3回目)に参加者からの質問に回答するための資料を用意して説明した。かつて自分が担当した「高齢者の学習と社会参加活動に関する国際比較調査報告書」(国立教育会館社会教育研修所1997)から、高齢者の学習と社会参加活動と健康との関係进行分析した資料を配付して説明した。

これまで、さらに今回の調査の結果、高齢者が学習・社会参加活動によって「健康」が維持できるという可能性が指摘され、さらに学習する高齢者が増加することによって老人医療費の節減も可能であるという試算が提示された。また、(社)国民健康保険中央会から1997年に出された「市町村における医療費の背景要因に関する研究会報告書」によれ

ば、老人医療費の節減に公民館を中心とする社会教育がその要因の一つにあげられ、さらに「農作業をしている老人が比較的多く、健康の維持に影響していると考えられる」と記されているなど、高齢者の学習・社会参加活動が社会的な意義を持つことが指摘されている。

後半は、宇都宮社会保険病院健康管理センター保健師塚本暢子氏を講師として依頼し、健康についての考え方、とらえ方を自身の生活体験を通じて、参加者との対話を通じて展開していただいた。特に健康についての既成概念や健康観について、意見交換しながら明らかにしていった。

(2)感想

今回は一貫して参加者との対話形式による展開を試みた。参加者の発言の量は相当数に達した。全員が自主的に発言し、自分の意見を述べあうようになってきた。やや論旨から外れる発言も見られたが、全体として参加意欲が高まってきたように見えた。終了後に参加者と塚本さんとの会話がしばらく続いていた。成人の学習者の特質をふまえた展開が必要であることを痛感した。

6	1月13日(木)	地域スポーツ活動～市民と行政の連携	国際学部教授 中村祐司	9
---	----------	-------------------	-------------	---

(1)講義概要

「地域スポーツ活動における NPO の可能性～市民と行政の連携を探る～」と題して、実際の運営に関わっている NPO 法人の総合型地域スポーツクラブ「サン・カルチャー」の活動内容を紹介した上で、運営存続をめくり直面している課題について説明した。具体的には、スタッフ不足と資金不足であり、前者については、事務局専任スタッフを切実に必要としているものの、資金の問題等からアルバイトもなかなか確保できず、さらに実務面での負担の分散化が困難で特定の運営者に集中してしまう点を指摘した。後者については、活動プロジェクトに対する助成や行政からの事業補助は多少あるものの、使途に制約があり、かつ経常的で安定的な資金ではないため、長期的な運営計画を作成することがなかなかできない、といった問題点を指摘した。後半はスポーツ分野に限らず、NPO の理念と実際の課題について、NPO 活動に関わっている受講生からの話を吸い上げたり、NPO の将来について意見交換を行ったりした。

(2)感想

NPO の活動維持が現実にはなかなか難しい傾向にあることを新聞記事などをもとに説明すると、仕事引退後の地域社会活動として NPO に関わっている受講生から、行政との調整や信任を得ることの難しさ、NPO スタッフ間の意見の相違をなかなか調整できないこと、サービスの対象となる人々からの要請に応えることで苦労した点など、経験をふまえた貴重な意見が提供された。それを受けて活発な質疑応答がなされるなど、NPO 活動の可能性と課題について切実感のある話が聞けたのは貴重であった。

7	1月21日(金)	市民農園の現状と将来	農学部助教授 野口良造	8
---	----------	------------	-------------	---

(1) 講義概要

将来の循環型地域社会における農業機械・農具の展望仮説を、次世代耕耘農具「IT クワ」の製作を通じて行った。このなかで、子供や老人、それらを取りまく地域社会のあり方を、栃木県のような地域社会を前提に提案した。中でも、QOLの観点から、市民農園やカントリーライフによる豊かな社会を提案した。さらに、そこで必要な技術を、農業機械・農具という視点から論じ、次世代耕耘農具「IT クワ」のコンセプトデザインを紹介した。

(2) 感想

準備はやや大変であったが、自分のやりたい研究テーマのプレゼンテーションをさせていただいたようで、非常に楽しかった。受講者が年配の人が多く、遅い時間まで、受講を通じて勉強されている気概に感銘した。今度は、もう少し幅のある年齢層を対象に講義をさせていただいて、意見を聴ければと考えている。

4 考察

今回の宇都宮市民大学を媒介とした地域社会と大学の調査研究との連携は、概ね所期の目的を達成したと思われる。大学における調査研究の成果を地域社会の特に成人を対象とした学習事業化する手法はこれまでも生涯学習教育研究センターで行ってきたが、今回の事業は次の点で異なった事業となっている。

主催団体が自治体であり、会場も学外（中心部の中央生涯学習センター）であるとともに、開講時間を 19:00～21:00 に設定したこと。

公開講座が教員単独の講師あるいは関連する領域となっているのに対して今回の講座が学部横断的に展開された研究プロジェクトであること。

講座の展開に当たり、メンバー間で「参加者との対話的コミュニケーションの時間を確保すること」「可能な限り研究論文のコピーや抜刷を配付すること」などが確認されたこと。

こうした諸条件によって調査研究成果を地域社会に対する提案とすることができたものと考えられる。大学における調査研究は、学内において学生や院生に対して専門境域の教授という形で一応の社会的責任は果たしているものと考えられるが、今後は地域社会に対して、単に普及啓発的にブレイクダウンして講義するという視点ではなく、調査研究を地域社会に対する「提案」という形としていくことが必要ではないかと考えられる。その際、今回のように宇都宮市の事業の中に位置づけられることによってより効果的な形で展開できるものと考えられる。今後も自治体との連携を通じて、学際的な調査研究を提案し、近い将来には自治体や市民有志を共同研究者として共同研究していくことが必要となってくる。市民参加型のプロジェクト調査研究も視野に入れながら、地域社会との多様で多彩な連携のモデルを構築していく必要があると考える。

5 参考資料(成人を対象とした講義を進める際の留意点)

自己中心的、自己決定的(自己決定できるようになりたい)であること。

自分で決めることに慣れている、講義に参加し、何かをするように言われても簡単には応じない。講座の目的がどうであろうと、自分自身の課題解決を第一に考えている。

蓄積された経験を学習資源とする(きづき、ふりかえり)こと。

暗黙のうちに前提とされている「理論」は、試行、失敗、成功の経験から導き出されたものである可能性が高く、これまでの経験や持っている知識に注意を払われたり、尊重されると安心して学習する傾向にある。特にテーマについてはすでになんらかの意見や考えを持っていると考えておく必要がある。それらを引き出し素材にして展開すると良い。

即効的な学習の効果を求めること。

すぐに役に立つことを学びたがる傾向にある。より具体的であることがら関心が強い。何日までにとどこまでできるようになる、といったアプローチを望んでいることがある。

自分に対する過小評価と不安、恐怖心とプライドが混在すること。

最初の時間は緊張と不安が交錯するので、講師からのリラックスしたアプローチは効果的である。特にわからないのではないかという不安と自尊心が両立している。

多様性(おとなは、みな違う)があること。

年齢、性、職業、家族構成、経済状態、健康などによって同じ講義をしても反応は異なっているのは当然である。

環境に敏感である(不快な環境に敏感であり、快適には無関心である)こと。

教室の気温、照明、静かさ、机イスの快適さ、講師の声の大きさ、板書の見え方、資料の文字のサイズ、難解な用語、カタカナなどに注意を払う必要がある。

参加者同士のコミュニケーションの場を設定すること。

だれでもほかの人と交わることを求めている。教材にばかり向かわずに、話し合いや協力関係を通して学び合えることを保障していかなければならない。

講師とのコミュニケーションの時間を確保すること。

他の人から認められたいという願望を持っている。自分の問題・関心や業績について講師や他の参加者から認められるよう配慮したい。

人権を守ること。

性別役割分業に基づくことや職業などの発言には人権感覚を大切にしたい。最近使用していないようにしているいくつかの言葉として「外人 外国人」「啓蒙 啓発」「父兄 保護者」「文盲 識字」「わが国 日本」「肌色 ペールオレンジ」「混血・ハーフ ダブル」などある。

時間を守ること。

成人は決まった時間だけ学習する傾向がある。終了時間を守ることが大切。